

新潟県柏崎市荻ノ島・門出（かどいで）訪問記

二〇二二年七月十二〜十三日

岡 哲文

新潟県の高柳町に茅葺き集落があることを知った。何で知ったかは覚えていないが、「私の時間を愉しむ生活情報誌 一個人五五号 二〇〇四年一月号」は、茅葺き集落の特集号が組んである。その中に日本中の茅葺き集落（二〇〇四年時点）が掲載されており、そこに「新潟県・高柳町」として紹介されていた。また、四四ページに「茅葺き民家を貸し切る 門出かやぶきの里 新潟県高柳町」という見出しで、門出地区の「おけや」と「いもち」が写真つきで紹介されていた。

是非訪問してみたいと思ったが、その後、この地域は二〇〇四年に「新潟県中越地震」、二〇〇七年に「新潟県中越沖地震」と連続して大地震に見舞われたこともあり、ついつい先延ばしになってしまった。また、高柳町も二〇〇五年に柏崎市と合併して柏崎市の一部となった。

まだ高柳町だった頃にパンフレットを送ってもらってはいしたが、私の就職が決まったり、契約が切れたり、色々あった。昨年冬に就職が決まり、ようやく有休も取れるようになったため、ならば是非行ってみようと思心した。

荻野島・門出地区は、いわゆる典型的な過疎地域で、既存のバス路線の採算が合わずに廃止され、地元のタクシー会社が住民の足代わりに、一日に数本、マイクロバスを路線バスとして運行している。二〇〇九年に岡山県八塔寺（はつとうじ）に行った時も、最寄り山陽本線吉永駅から、備前市が経営するマイクロバスが走っており、乗客は主に通院する老人たちだけだった。これもそこと似た状態なのかと思ってしまった。

前述の如く、荻野島・門出に茅葺きの宿があることはあるが、団体で宿泊する場合のみ利用でき、独りでは使えないので、高柳地区にある「じよんのび村 萬歳楽」に決定した。かけ流し温泉が魅力的だが、宿代は当然一万円を越す。給料取りになって少し余裕も出てきたので、宿はここに決定した。「じよんのび」とは、新潟の方言で「ゆったり、のんびり」という意味で、ゆったりのんびり過ごして欲しい宿だった。

池袋駅午前八時四〇分発の西武の高速バス直江津行に乗車して、柏崎駅前下車する。柏崎から、地元路線バスで岡野町車庫行きのバスに乗り換える。終点の岡野町車庫から柏崎タクシーのバスがじよんのび村を経由して、荻ノ島、門出方面に走っているが、接続が悪く、じよんのび村に頼んで車で迎えてもらった。このじよんのび村は、車での送迎に快く応じてもらえる。恐らく交通の便が悪すぎることとも関連があるのかもしれないが、私が頻繁に行く、富山県の五箇山でも頼めば民宿や宿の主人、女将さんが目的地まで車で送迎してもらえる。翌日の荻ノ島まで、更にその翌日、チェックアウト後、ほくほく急行十日町駅までの送迎も全部応じてもらえた。

旅行当日は雨で、柏崎駅に到着したら大雨が降っていた。新潟県の山の中だからもしかしたら、都心と違って少し涼しいだろうというこちらの予想は見事に裏切られた。何気に蒸し暑い。なので宿にチェックインしたら、さっそく温泉で汗を流すことにした。

※萩ノ島・門出の後で新津に滞在した。タクシーを利用したら運転手が、新潟の夏は特有の湿気があってかえって暑いと話していたが、まさにその通り、新津は蒸し暑かった。

翌日は昨日までの大雨がうって変り、快晴だった。宿の車でまずは萩ノ島へ送っていた。バス停は地域の集会場のようになっているが、誰も人はいない。茅葺きの集落を維持するための募金箱が目に入った。萩ノ島・門出集落は重要伝統的建造物群保存地区でもなければ、建物が文化財等に認定されてもいないため、独自に維持管理している。村内には約四〇戸の茅葺き集落があるが、葺き替えなどは順番でやっても追いつかないためか、中にはトタンに替えてしまった民家もある。萩の家・島の家という民宿があり、それらの運営は萩ノ島ふるさと村組合が運営している。この後訪問した門出の「いいもち」、「おかや」でもそうだが、これらの宿は主に団体用になっており、一人での利用はできない。

萩ノ島集落はいわゆる「環状集落」といい、家が畑を囲むように建てられている、非常に珍しい形態である。私が訪問したときは、まだ九時過ぎだったためか、集落内や畑には誰もひとが居なくて、稲がびっしり緑色に実っており、道にはカラスが沢山舞い降りておりて鳴いていた。因みに平日だったためか、集落内を歩いているのは、私だけだった。以前、岡山県の八塔寺の集落を見た時も、集落内は私だけだった。シーズンオフなうえに、その日はみぞれ交じりに荒れた天候だったからでもある。見終わってバスに乗るころには、農作業をする村民の姿を見ることができた。



上から萩ノ島環状集落を一望。集落内の茅葺きの古民家。

道沿いにかやぶき民家を見ていく。屋根には苔むしているのもあり、また土壁や木造の

壁には年代を感じられる。今まで見てきた集落は大体、綺麗に塗り直したり、補強したりしているからである。全部歩いて見回るが、それほど時間はかからない。内部公開をしている民家はない。前述した民宿は内部を見ることができないから、外から眺めるだけにする。

この辺りの茅葺き民家は「中門造り」（ちゅうもんづくり）という形になっている。母屋から中門、主に馬やを突き出させたもので、南部地方の曲屋と同じくL字型をしており、曲屋では一部分は住居、一部分は馬やとなっているが、中門造りでは馬や以外に便所、出入り口などになっている。勿論、普通の民家の内部を見ることができない。また前述した萩の家・島の家も、私が行った時は、内部を見ることができなかった。

集落の人に頼んで、車で門出まで送っていただいた。大通りから少し中に入った所にあるらしく、行き方を示した看板が出ているから、それを目印に集落内を歩いていく。集落内に茅葺の民家は一軒もない。ここにあるのは前述した「いいもち」と「おけや」だけである。いいもちは白壁、おけやの壁は木造である。いいもちにはたまたま人が滞在していたため、内部を見せてもらうことにした。どうも、少し前まで小学生が宿泊で滞在していたようである。

入り口には鍋を置いたかまどと、小さな四角い囲炉裏があり、周囲を座って囲めるようになっていいる。階段のぼって天井を見ると、骨組みと梁がむき出しになっている。現代の子供たちにこういうのを直接見せて学ばせるためなのだろうか。このスタッフは常駐しているわけではなく、利用した前後の日だけ来ている。畳の大部屋には囲炉裏があり、壁を見ると「平和 P E A C E」と書かれた紙が貼ってある。英語だけでなく、他の言葉も混在している。外国人の少年少女たちにも利用されているのかもしれない。

少し離れたところにおけやがあるが、こちらはスタッフがいなかったため、外から眺めるだけにした。いいもち、おけやでも団体での宿泊のみで、貸切も可能である。また、もちつき、紙漉き、ブナ林遊び、天体観測など、日頃都心では体験できない貴重なイベントを行うこともできる。勿論予約制で別料金である。



門出の上がいいもちに置かれていたかまど。二枚目はいいもちに。三枚目がおけやの外観。

門出の茅葺き古民家はこれのみである。意外に早く済んでしまったため、車道を歩いて少し行ったところにある「大開（おおひらき）の柵田」を見に行く。案内板があるため、それに沿って歩いていけば行き着く。高台からひし形の柵田が見渡せる。天気も晴天で、時期的に緑色がまぶしい。

門出のバス停でバスを待った。反対車線にバスが到着すると、中から地元の人たちが沢山下車するのを目撃した。八塔寺の時もそうだが、何気に利用されているのだと思いながら、じよんのび村方面行きのバスを待った。バスが来てびっくりした。乗客は私だけで、途中から乗車する人もいなかった。

宿に戻ったが、その日は東京の猛暑並の暑さだったので、昼ごはんよりすぐに温泉に浸かって汗を流した。いつでも温泉に浸かれるのがこの宿のいいところである。温泉から出て食堂で昼ご飯を食べた。

翌朝、私は宿の車で岡野町車庫まで戻って、バスで柏崎駅へ行き、そこからJR信越線で直江津に向かおうと考えていたが、せっかく旅行で来たのだから、別ルートで直江津へ向かおうと、北越急行十日町駅への送迎が可能かどうか、フロントに訊いてみたら、可能とのことなので、乗り鉄目的で十日町駅まで送ってもらうことにした。

北越急行線は、地方の私鉄にありがちなレールバスではない、普通のカラフルな車両が走っている。路線の殆どがトンネルで、トンネルの中に駅があったりもする。何だか武蔵野線を髣髴とさせる。地方の私鉄の割にはかなり乗客が利用していた。

閑話休話。

今回、直江津から新津に行った。新津で私用があったため、二泊三日した。新津の駅前には観光案内所がない。駅構内のコンビニにパンフレット等、簡単な案内がある程度だから、新津に滞在する場合は、事前にパンフレットやインターネットで調べて宿をおさえておいた方が無難な気がする。駅前にはデイリーヤマザキと居酒屋の庄屋しかなく、デイリーヤマザキはパン屋を併設しているためか、ちょうど学校が早く終わった地元の高校生のたまり場化していた。ここ以外に、時間をつぶせるような場所は見当たらない。私は二日も昼を庄屋のランチで済ませた。

観光パンフレットによると、新津には「新津鉄道資料館」という施設の説明がある。新津はかつて鉄道の要衝にあり、信越本線、羽越本線、磐越西線が乗り入れている。機関区や電務区などもあり、鉄道のまちと呼ばれていた。昭和五八年（一九八三）一〇月十四日（鉄道記念日）に開館し、平成一〇年（一九九八）に現在の場所にリニューアルオープンした。新津駅からバスに乗り、新津工業高校前で下車し、すぐの場所にある。近くは住宅地と畑である。入り口に東北新幹線先頭車両の実物模型やパンタグラフなどが展示してある。資料館と聞いていたので、小規模の展示施設をイメージしていたが、そのイメージがただの思い込みであったことを痛切に思い知らされた。かつて単線区間（東京近郊では八高線が有名だった。）で使われたタブレットや渦巻型の通票受器、国鉄時代の丸い押しボタ

ン式の券売機、硬券切符、信越線時代の駅の時刻揭示板。(行先、特急名などが書かれたプラスチックの板) など、少年時代に旅行に行った時に目にしたものが現れた。実は国鉄時代の押しボタン式券売機は大人が青、子供は赤で、子供が買う時はプラスチックの板を上にあげて買っていたのである。少年だった頃、いつか自分も青のボタンで一〇〇〇円以上買って遠くに旅行してみたいなんて考えていたが、自分のお金で旅行できる身分になった今、もう丸い押しボタン式の券売機を利用することなく、スイカで移動し、長距離の場合、緑の窓口やビュープラザで特急券とまとめて購入しているのである。駅の時刻案内板も、地方で良く目にした。信越本線が、長野新幹線の開通で横川〜軽井沢間が廃止された今となっては、上野行きなどと書かれたそれは、もう永遠にお目にかかれない代物である。少年時代の旅の思い出が一気にフラッシュバックしてしまい、しばらくそこに立ちすくんでしまった。そのほかにも鉄道模型、グリーン車の座席、廃止した鉄道の案内などもあった。私でさえ懐かしく感じるのであるから、私より年上、四〇以上の人にはより一層懐かしさを感じられる場所であること請け合いである。

帰りはバスが4時過ぎまで来ないので、タクシーで駅に戻ることにした。鉄道資料館は駅から離れている上にバスの便が悪いから、下手をすると往復タクシーに乗る羽目になるかもしれない。でもこれは地方に滞在した場合、ある意味仕方のないことなのだと思えてならない。



一枚目、新津鉄道資料館前においてある新幹線の車両。二枚目、資料館の入り口。三枚目、柏崎のじよんのび村外観。

各種データ。

荻ノ島環状集落かやぶきの宿「荻の家」「島の家」。

宿泊料金 二万五千元。宿泊定員九名。個人の宿泊は不可。

食事 夕食、一人前二〇〇〇円、朝食一人前一〇〇〇円。

問い合わせ先 おぎのしまふるさと村組合。〇二五七・四一・三二五二

門出かやぶきの里宿 「いいもち」「おけや」。

宿泊料金 一泊二食付 大人七一四〇円 小学生五七七〇円 幼児（三歳以上） 三六七

〇円 体験イベント 餅つき、和紙すきなど別料金。

問い合わせ先 門出かやぶきの里 〇二五七・四一・三三七〇

じよんのび村「萬歳楽」。

宿泊料金 一泊二食 平日一万三百四十円から。土日などは若干高い。

和洋両部屋あり、チェックイン午後十五時、チェックアウト午前一〇時から。

浴場時間 午前一〇時から二四時までと午前五時から八時まで。

電話番号 〇二五七・四一・二二二二

ホームページ <http://www.jon-nobi.com/div/institution/manzairaku.html>

新津市新津鉄道資料館。

開館時間 午前九時三十分から午後十六時三十分まで。

休館日 月曜及び一二月二八日から一月三日まで。

入館料 大人二〇〇円 子供一〇〇円。団体二〇名以上 大人一〇〇円 子供五十円。

電話番号 0250・24・5700

JR新津駅より京ヶ瀬及び沢海行バスで新津工業高校前下車すぐ。但し運転本数はかなり少ないので要確認。